

芸のいまり

荒谷 卓縣治神宮武道場

武道における力の発揚のアイデア

武道における力の使い方は、一般のスポーツにおけるそれとは大きく異なる。スポーツの場合、今の自分にないもの、足りないものを新たにつける、つまり、外から新しい力を取り入れて自らの肉体のパーツを強化するという手法がとられる。

くかという発想をとる。
うに効率的に、そして統一的に使っていもの、自己の内面にあるものをどのよもの、自己の内面にあるものをどのよ

だから武道においては、肉体的な

することが出来るという発想である。の統一を高めれば、武道的な高みに到達の統一を高め、内面に分散している力学的な発想ではなく、内面にある力の学的な発想ではなく、内面にある力のピークに到達することが多い。身体のピークを過ぎた後に、武道家としてのピークを過ぎた後に、武道家としての

要素になってくる。とこで武道では、内面に分散している力をいかに「集中・管理」できるかが課題となり、そのために身体の中心が課題となり、そのために身体の中心が課題となり、そのために身体の中心が課題となってくる。

瞑想や座禅にも意識を一か所に集約

これがさらに武術的な高みに到達

うのである。この域までいった人が、俗っていると、自己の肉体の中に分散した力をり、自分が使う武器や相手の人間であり、自分が使う武器や相手の人間であり、自分の中核 = 中心から発するエネルギーの動きの中に取り入れてしますると、自己の肉体の中に分散した力すると、自己の肉体の中に分散した力すると、自己の肉体の中に分散した力

正「武道の達人」と言われる人たちだ。 に「武道の達人」と言われる人たちだ。 では臍下丹田が中核としての では臍下丹田が中核としての では臍下丹田が中核としての では動する力の強弱、方向性までを管 でもるようになる。

では、力を身体の中心に集約したまま、そのエネルギーを減退させずに発

ま、そのエネルギーを減退させずに発

措させる仕組みとはいかなるものなの

携させる仕組みとはいかなるものなの

ボーが減衰することなくまた戻る。

やのための循環ルートを確立すること

が鍵になる。

の例として剣術がある。ではなく体感していくしかないのだではなく体感していくしかないのだった。

剣術は大きく神道を元とする流派

(鹿島神流等)、武家から出た流派(一大高等)、仏僧が創た流派(竹林流等)があるが、鹿島系剣術は螺旋の動きでその特徴がある。縦や横や円の動きではなく必ず螺旋を描くような動きにはなく必ず螺旋を描くような動きに

みを確立しているのである。とでエネルギーが減衰しない仕組ることでエネルギーが減衰しない仕組ることでエネルギーが減衰しない仕組ることでエネルギーが減衰しない仕組

外からのエネルギーを受容する発想

ろうか?とは、実際にはどのようなことなのだとは、実際にはどのようなことなのだしかしエネルギーの循環を維持する

はできない。
はできない。
はできない。

エネルギーを循環させるのである。
れが出ーや意志を取り入れることが必ないギーを体内に取り入れることによって
しまうのではなく、他との関わりや接
関によって外に作用し、さらに外のエネ
かギーを体内に取り入れることが必

ここで重要な点は、物質的な面以上

とである。これが崩れると、エネルギー質することがあってはならないというこの中核にあたる価値観の部分は、外部の中核にあたる価値観の部分は、外部の特にあたる価値観の部分は、外部の特にある。これが崩れると、エネルギー

は散逸し、烏合の塊に帰すことになる。 つまり、相手のエネルギーや意志や価値観を受け入れながらも、自らのエボルギーや意志や価値観を変化させずに、自らの力として相手に作用させずに、自らの力として相手に作用させる。これは武術的には相手の攻撃を受けながらも、それを逆に自らの力として相手に作用させること自じである。

るのである。 は観は変化させずに循環を成立させるのだが、こちらの基本的な思想や価をのだが、こちらの基本的な思想や価をのだが、こちらの基本的な思想や価をでいた。

武道的な力の発想も精神的な力の発想を学ぶことができるのである。 武道的な力の発想も精神的な力の循環を体内に取り込み、体の中で力の循環を体内に取り込み、体の中で力の循環を体内に取り込み、体の中で力の循環を存在した自然観やさまざまな社会概存在した自然観やさまざまな社会概念が、武道の中に投影されて現在まで急が、武道の中に投影されて現在までの根本を辿ることで、日本人の伝統的の根本を辿ることができるのである。

「不変的なもの」を見極める社会において「変わりゆくもの」と

この原理や発想は社会全体にも通

滞りなく行われている社会である。がぶれることなくエネルギーの循環が用する。発展成長する社会とは、核心

かつての日本も、仏教や儒教やキリスト教など、他の価値観を拒絶せずに 受け入れながらも自らの価値観を変 代させず、受け入れることで社会の活 化させず、受け入れることで社会の活 としてきた。自分たちの本質は変化 させずに結果として日本の成長のエネ ルギーとして受け入れ、変化させてし まう。それが日本の社会の発展の仕方 であった。

現代の日本社会には停滞感が漂って 現代の日本社会には停滞感が漂ってしまったことである。逆に言うと、こなくなったことである。逆に言うと、この二つの要素が健全化すればエネルの二つの要素が健全化するには停滞感が漂って 現代の日本社会には停滞感が漂って

だろう。歴史的に昔からずっと社会の 中で変わらずに残っているものが、 ずにいるところ」が何なのかを知るこ から、社会の歴史を観察することで、 会とは経験的に成立してきて るものの、変わってしまっている以上、 とで中核を再発見することができる これまでに「変わったところ」と「変わら してもすぐにできるものではない。 ろう。無理やり何か中核をつくろうと してもなかなか見つけるのは困難であ 現代社会において新たに中核を探 れの社会の中核である。変化 社会のエネルギーの要素では いるのだ わ

核ではない。

ここで大事なのは真の中核となるべきものと、その周辺にあるイデオロギーは変質し衰えとである。イデオロギーは変質し衰えとである。イデオロギーは変質し衰えとである。

起こすことはできないのだ。い。中核をとり間違えれば新しい風をそこから新たなエネルギーは生まれな変えるべきものを変えまいとしても

そしてもう一つの要素である「新しいそしてもう一つの要素である「新しいなった。」といが、「それは無理だ」と誰もが思うとする大企業には新風は巻き起こせないが、「それは無理だ」と誰もが思うとうな挑戦をしたベンチャー企業が新たうな挑戦をしたベンチャー企業が新たな風を巻き起こすのと同じだ。

ではい。 既存の常識やルールや秩序から逸 既存の常識やルールや秩序から逸

時が来ている。 時が来ている。